『天文鈔本新古今倭謌集春夏』について

片山　享

一

河野記念文化館所蔵にかかる『天文鈔本新古今倭謌集春夏』一冊については夙に小島吉雄博士『新古今和歌集の研究』（昭和一九年刊）の「新古今和歌集註釈書の話」に「山崎氏入手の古注といふのは、天文十九年四月二十一日伊勢白子住の内山宮内少輔秀隆なる識語を有する『新古今注』と題する春上下夏の三巻だけの全注であるが、所注歌数は流布本よりも多く、所謂烏丸本系統の本文である。内山秀隆といふ人は、どういふ人かよく分らないのであるが、この人はただ書写しただけで、恐らくこの著者ではあるまい。その注の中に宗祇・兼載・心敬等の説を引用してをるところなど、どうも連歌関係者の手になつたもののように思はれる。歌の肩に秘歌と注したもののうち、一首だけは注釈があるが、他は全部注釈が付せられてゐない。」と紹介された本と思われる。書誌を簡単に記すと、袋綴本。縦25・1センチ、横18・3センチ。表紙は渋を引いた焦茶厚手紙で、小島博士の紹介には『新古今注』と題するものとあるが、（注1）現存本は中央に赤地紙「天文鈔本新古今倭謌集春夏」と題簽がある。新しいもので後に付せられたものであろう。鉄には左肩に「新古今倭謌集天文十九年奥書春夏之部」とある。第一丁より本文。新古今和歌集序とあって真名序を収め、次いで新古今和序を記すが、これは仮名序注である。次いで内題「新古今巻第一　春哥上百七十六首」とあって和歌注釈に入る。本文料紙楮紙、墨付八二枚。奥に、

勢州白子住
内山宮内少輔
天文十九年庚戌四月廿一日巳時　秀隆（花押）
家之御本ニテ度〻校合終、秘本ナル
者歟　後藤氏持主　」
つく〳〵と思へは近キ世中を心となけく我身也けり
幾程の身そと□いかゝ思ふらん
ひとひもいとへ老の世の中
東三川午（牛カ）クボニ住ス　古白法師
此連哥百廿貫而筑波集ニ入ル
牧古白法師　」

とある。本書の拠った新古今集は小島博士の御指摘の如く異本系であって、春歌下の

家持
111故郷の花は散つゝみよし野ゝ山の桜はまた盛なり
太上天皇
148いかにせん
赤人
165恋しくは形見にせんと我宿に植し藤なみ今さかり也

の流布本にない三首がある。148の歌は初五字のみを記すが、注文に「よにふるながめしばの戸にとはよにふるながめしとつゞくる也」云々とあって、太上天皇

いかにせん世にふるながめ柴のとにうつろふ花の春のくれ
かた

である。天理図書館蔵烏丸本『新古今和歌集』本文と較べると111・148は烏丸本と一致するが、165は烏丸本になく、また巻三夏部に赤染衛門・増基法師・太上天皇三首が烏丸本にあるが、本書にはない。後藤重郎氏著『新古今和歌集の基礎的研究』異本所収歌（別記Ⅱ）によると、165の歌は同氏蔵『紅梅文庫旧蔵八代集』本に見えるよしで、本書と完全に一致する伝本はないようで、現存しない異本系新古今集に拠ったものと思われる。

本書には錯簡がある。59丁一枚（214～217の和歌および注文）は本来64丁の次にあるべきもので、現存本は次丁と文字の高さが異なり、64丁の次に戻せば一致するのであって、本書以前の伝本間の錯簡ではなく、本書を綴じかえた時に生じた錯簡と思われる。

本書は春夏部のみの全注本であって、本来これで完結したものなのか、新古今集全巻注本の零本であるのかは明らかでない。内題をみると、

新古今巻第一
春哥上　百七十六首

とあるが、春哥上に対する春哥下の部立名はない。春哥上に付せられた「百七十六首」の歌数注記は、実は春哥上下の歌数で、実数は一七七首であって、数えた時のあやまりであろう。夏部は、

新古今集
夏部　百九首

とある。実数は一一〇首である。こうして本書の部立名の記し方は極めて杜撰である。全巻注本であったか否かを知る手懸りとなりそうなものに作者名に付した入集歌数注記がある。春哥上に集中的に記されているが、記載順にあげると次のごとくである。

良経七九首・太上天皇三三首・式子内親王四九首・宮内卿一五首・俊成七二首・俊恵一二首・西行九四首・国信五首・赤人七首・教長一首・貫之三三首・家隆四三首・仲実一首・家持一二首・躬恒一〇首・越前七首・通光一三首・秀能一七首・重之一一首・惟明親王六首・志貴王子一首・慈円九二首・清輔一二首・実定一六首・定家四六首・中務四首・頓通一首・敦家一首・俊頼一一首・通具一七首・俊成女二九首・定頼四首・大貳三位六首・康頼王母四首・有家一九首・八条院高倉七首・千里三首・孝標女一首・具親七首・寂蓮三五首・行慶一首・伊勢一五首・勝命法師一首・高遠三首・輔仁親王一首・崇徳院七首

右の入集歌数注記を烏丸本と比較すると、貫之（本書三二首・烏丸本二二首）千里（本書三首・烏丸本二首）を除くと一致している。右二名の注記はいずれも烏丸本のあやまりである。もっとも烏丸本の歌数注記が果して本文に即したものであったか否かは問題である。例えば通光（歌数注記一三首・実数一四首）は単純な数え違いとしても、烏丸本には十一首の切出し歌を含んでいるが、例えば家持一二首は切出し歌を含めた数であり、太上天皇三三首や頓通一首は切出し歌を除外した数が歌数注記となっている。本書について言えば家持一二首は実数であったわけであるが、同じ原理で言えば太上天皇三四首、赤人八首の歌数注記でなければならない。このことから本書の歌数注記は注作者の付したものではなく、おそらく他本の歌数注記を踏襲した本書の依拠した底本に記されたものであったと思われる。このことは春哥上の崇徳院七首以降が記されていないことからも推定できる。こうして入集歌数注記からは全巻注の存在を明らかにすることができないのであるが、本書の構成が新古今真名序を記し、仮名序に注を付していることからみて、注作者が新古今集全巻注釈を意図したことは明らかであって、全巻

注が執筆された可能性も考えられる。とするならば東常縁の『新古今和歌集聞書』を嚆矢とする室町期の新古今注釈書が全て選釈本である中にあって、最初の全巻注釈書が企図されたことになるわけで、現行最初の全巻注『新古今増抄』（寛文三年刊）の百年以上前に意図された新古今全巻注釈本として研究史上注目すべきものと言えよう。

二

本書の注釈の性格をみてゆく時、注文に心敬説・宗祇説・静喜（新田尚純）説・木戸（孝範）説・宗長説を引き、特に心敬説が多いことが注目される。該当注を掲げると、

(1)花ぞ見る道の芝草ふみ分て芳野丶宮の春の曙（九七）

道の芝草ふみわけて芳野丶宮、此哥を心敬の説は丹後のよし野にてとあり。浦の躰をみるに浪の立たるは花のごとく見事なりと云り。但静喜の説には名哥にも道芝と云哥を吉野に説たればやまとの吉野たるべきと也。本より古都なれば昔に替らぬは花斗也と説也。

（頭注）是ハ筑前ノ吉野ノ宮ニテ読リ。天智ノ皇居也。昔ノ春ノ明更ノ面白キ事ヲ詠ル人モナシト云リ。今ハ花殿斗昔ノ春ノ明更ヲバ見ルトヨメリ。

心敬説は「道の芝草ふみ分て」の表現から吉野の宮を丹後の吉野とみ、荒廃した旧都に立って沖の波の花を見る海辺眺望の解で極めて幻想的傾向の強い解釈である。静喜説はそれに対して名歌にも道芝と云う歌を吉野に詠んでいるからという理由で大和の吉野とする。静喜が想起したか否かは解らぬが、この歌の本歌は田辺福麻呂の「悲二寧楽故郷一作謌」の反歌「立ちかはり古き都となりぬれば道の芝草長く生ひにけり」（万葉巻六）と考えられるから静喜説の方が妥当であろう。注作者は静喜説に加担している。頭注小書は筑前の吉野宮として「花ぞ見る」を眺める人もない古京の春の曙をみるのは花だけだの解を掲げる。この頭注は注作者のものか、後人かは不明であるが、（恐らく後人と思われる。）後に別注を加えたものである。ところで、右の心敬説について、『新古今抜書抄』に、

此よし野の宮は大和にはあらず、丹後也。或は出雲の皇居也。古はてゝみちしば打茂りたる也。こゝのよし野にても花をみるぞといへる也。実の花にあらず。たゞ景のおもむきおもしろき在所にて春の曙をみたるは花に不劣といふ心也。海辺の眺望のこゝろなるべし。

とあり、『抜書抄』の方が詳細であるが同一解である。嘗て金子金治郎博士が『新古今抜書抄』解説（注2）において、本書を

「一応兼載と認めてよいと思うが、この注釈の場合も先人の説の祖述継承という事情を踏まえていること、そういう継承を前提とした上での兼載作であることに注意したい。」とされ、奥書の前半の、

爰に雲風を友とする修行者侍るに、弱冠なる人、此うた共ふしんせられ侍。いなみがたくて、昔あまたの人の卅賀、たづね見侍しはし〳〵を、ふでにまかせてかきとゞめぬる。外見あるまじき堅盟もあれば、はかなき水ぐきにあらはし侍也。

を本書を兼載に書き与えた人の筆とみ、それを心敬と想定され、「弱冠なる人」を兼載として、その時期を兼載が心敬に師事したおよそ文明二年（兼載十九歳）から心敬没の文明七年（兼載二十四歳）の間と推定されている。本書の心敬説は、『抜書抄』の所説がまさに心敬のものであったことを明示しているといえよう。

(2)山寺の春の夕ぐれ来て見れば入会の鐘に花ぞちりける（一一七）

入会の鐘に花ぞちりけるとは心敬の説にはいりあひの鐘のひゞきにより花はちると也。物はひゞきによつての事なればなり。静喜の説はいりあひのろう〳〵となりて其時分花の散たるのおもしろきさま成べし。此哥は津の国金福寺と云山寺にての哥也。

入相の鐘のひゞきによって花が散るとみる心敬説はいかにも繊細で鋭い。『宗長秘哥抄』（注3）には「能因此歌大に心得がたし。先山家の鐘楼の中に花のゑださし入たるが鐘のひゞきに散也。是まづ歌のおもて也。（下略）」とあって心敬説はさらに増幅されて聊か荒唐無稽の解となっている。なお、『九代集抄』には「鐘のをとに花のちるにあらず。その折ふしなり。」と心敬説を否定している。また金福寺は建立寺とある。

(3)散にけりあはれ恨の誰なれば花の跡問春の山風（一五七）

あはれ恨の誰なればとは、心敬の説には風が花をばちらしたるよと恨たるに、花の跡に風のふくを見てさては風の科にはあらず。生得花のをのづから散けるよと花を恨たる心也。五もじにちりにけりと云字にかなへり。宗祇の説は青葉の時風のとふを見て昔花に執心ある者ばし風となりて青葉までとふかと也。木戸の説は此花の跡をうらめしげに風の吹て過るはたがちらしたる花ぞと風のうらむる義也。

心敬説は、風を恨みに思っていたが、花が散った跡に吹く風を見て、風の科ではなく花自らが散ったのだと気づき、人が花を

恨む心を詠んだ歌と解し、宗祇説は、花に執心深い誰人が風となって散った花の跡を訪うのだろうと解し、木戸説は、散った花の跡を吹き過ぎる風が、一体誰が散らしたのかと恨む意と解する。『抜書抄』には、

此落花をうらみがほに春風の吹をみて、ちらすにも人のわざにあらず、誰とおもふなれば後悔がましく吹らんと心なきに心をつくる、此道の習也。又或説に、花にしうしんふかき人かぜと成て玉しゐ花の跡をとふは、たれ人のわざにかとうたがふ心也と。いづれの説にても心よせなるを用給ふべきかといへり。

とあって、心敬説とは異なる。心敬説が、人が風を恨むとみたのに対して『抜書抄』は風が恨むさまと解し、方向としては木戸説に近い。注目すべきは本書の宗祇説が『抜書抄』或説と同一解であることで、『抜書抄』或説は宗祇説であったことになる。ところで宗祇の『自讃歌註』(注4)には、

此哥正広あらぬやうに申けるとぞ、おぼつかなし。心はたゞ花ちりはてゝ物ふかき木のもとなどへ山風の又尋来てうちをとづれたるさま、花の跡をうらみたるやうなれば、おし返して哀れ其うらみはたれならん、かぜの我うへにこそ其恨は侍れと云心にこそ。

とあって、本書宗祇説、『抜書抄』或説とも異なり、『抜書抄』解に近いものになっている。宗祇『自讃歌註』は文明十六年の成立であるから、『抜書抄』或説を文明二年以前の宗祇中年期の所説とみれば、晩年になって宗祇の解釈が変ってきたとみることもできよう。ついでに云えば、『抜書抄』或説は、いかにも心敬好みの解釈であって、『抜書抄』が「いづれの説にても心よせなるを用給ふべきかといへり。」と言ったのはもっともであったといえよう。木戸説は、この注文のみにみえるもので、石川常彦氏によると、(注5)この歌は自讃歌注諸本のうち、常縁注温泉寺本・叡山文庫A本および歌集抄本・宗祇注刊本のみにみえるもので、孝範注本にはなく、自讃歌注からの所説でないことが注目される。

(4)春過て夏きにけらし白妙の衣ほすてふ天のかぐやま（一七八）

心敬の説は雲に云り。

この注文は難解であるが、天理図書館蔵『百人一首聞書』に、

是は新古今集に夏のはじめの哥也。先春過て夏くると云事めづらしからざるごとく也。然ば作者はこゝを粉骨に沈吟する也。春過ぬればはやく夏の気色見ゆる由也。心は先底にやすみをこめたる哥也。春の程は霞たなびきて峯に衣を

ほすも見えず、夏きたりて霞はれ峯しろ〳〵と衣ほすも見えたれば、さては山も更衣を。したるかと云心也。白妙は衣の枕詞衣の本色也。夫も昔は北山に天人くだりて衣ほしけるためしあり。如此思よれる也。而ニ此衣ほすとは何を山の衣がへといふと見るに白雲を山の衣とせり。春は偏ニ霞と見しを夏は人も更衣をする時分なれば山も白雲のころもをかゆるといふ分也。惣の心は四季のをしうつり先天地のよく知事をいへり。さて此哥の心をもて定家更衣の哥ニ

大井河かわらぬ埒をのれさへ夏きにけりと衣ほすらし、これも衣はなし。波のしろきを埒の更衣と読なせり。(後略)

とある。白妙の衣を白雲に見立てた更衣説による解と思われる。本書は識語に「此聞書ハ了俊招月依ニ悃望一講釈、近年孝範木戸三劔対ニ宗祇一老口被ニ演覧一大略以ニ其儀一同。」云々とあり、(注6)あるいは相伝の解として伝えられた白雲更衣説があって、心敬説はそれによったものかもしれない。

(5)打しめり菖蒲ぞかほる時鳥鳴やさ月の雨の夕暮(二二三)

うちしめりなくやのや雨の夕暮、此三は別の詞也。此やは疑にもあらず、もにかよふやにもあらず、たゞやといへるや也。此哥を心敬の説によき沈香をたきたるにちり〳〵と立てしかのあるやうの哥也と云り。静寓の説には

へ沈香坐ニ花亭一吹レ笙、と云句の心なるべしと也。時鳥なくやさ月のあやめ草あやめもしらぬ恋もするかなの本哥なり。

心敬説は、この歌の情調についての印象批評、静寓説はそれに触発されて典拠を求めたものであろう。

その他、(6)二五三歌の注文に「そともは心敬の説にはせど也。さしすせその五韵なり。」とあって、心敬はそとも(外面)をせど(背戸)と解していたというのであり、(7)二七八の注文には「心敬はひさ木、宗長はひさ木と云へり。」とあって、楸を心敬はひさぎ、宗長はひさきと読んだというのである。

以上本書にみえる先人説所引の注文を検討してきたが、所引数からみても心敬七・静寓三・宗祇一・木戸一・宗長一で、心敬説が群を抜いて尊重されている。

ところで、心敬説に関連して『新古今抜書抄』を掲げたが、これ以外にも『抜書抄』と相関する注文が若干みられる。

○道のべに清水ながるゝ柳蔭しばしとてこそ立ちどまりつれ(二六六)

此道のべの清水へ修行の時立寄てすゞむまゝしばしとおもひたれば日を暮したるよとの義也。つれと云字妙なりと云り。

（抜書抄）これは行路納涼の躰、何もなくよみたる哥也。但たち留けれなどゝ同事とみるべからず。つれのもじきどく也。しばしとおもひてたち留つるに日をくらし時をうつしけるよと云心はつの一字にこもりたるなるべし。

『抜書抄』の注は詳細であるが、注の眼目である「つれのもじきどく也」の指摘は同一である。しかも本注は「つれと云字妙なりと云り。」と或人の言としているのが注目される。その他、四一の歌について典拠となる漢詩句の指摘、「色在 分 安 残雪 底と云句アリ」（『抜書抄』有色易別残雪底無情難弁陽中と云詩の心也。）、二二〇「雲埋 老樹 空山 中と云句の心也。」（『抜書抄』雲埋老樹空山裏彷彿千声一度飛と云詩、こゝろに叶へるにや。）も同一である。本書の頭注小書は、おそらく後人の付したものと思われるが、巻頭歌の頭注、

或説ニ云、此哥ハ巻頭ニ相叶リ。長高ク心深也。吉野ニ古郷ヲ説ナラハセリ。ソレヲ古ニシ里ト云述ル事優美成ベシ。新古今ト云ル題号ノ心含タル也。古ニシ里ヲ古今ニナズラヘ立春ヲ新ノ字ニ相当セルト也。大方筆ニ書難キ物ヲヤ。

は、『抜書抄』の、

或人のいはく、此哥巻頭に相叶へり。長たかく心ふかきと也。芳野にふる里よみならはせり。其をふりにし里といひのべ給へり。ふりにしさとゝいふ事を古の字にもたせ春といへる事を今の字にふくませたる也。又云古今集の巻頭に春たつ心のたぐひの字相伝せるとこそ。大方の義也。筆にのべがたきことゞも也。

に拠る所が多く、また二七歌注の、

又云、水ト云字眼目可レ成。今迄ハ緑水ノ閑ナルニ雪消ノ水ナラズハ俄浪難レ立。平地ニ波瀾ノ心也。

（抜書抄）此水上に有深山の雪のとけゝるに此川に白浪のたつはとさとりしたる也。水と浪との文字眼目異名なるべし。今まできよ滝河の静なるに雪消の水ならずは俄に浪たちがたし。是は平地にたつ波浪といふ心なるべし。

も字句に多少の相異はあるが、『抜書抄』からの抜萃である。兼載『自讃歌聞書』（注7）も無関係ではない。

○雖波がたかすまぬ波も霞けりうつるもくもる朧月夜に（五七）

かすまぬ浪もかすみけりとは水は陰なればかすまぬ月の朧なればうつるもくもると云り。うつるもくもるとはせいの詞也。

（自讃歌聞書）水は陰の気也。さるによりてかすまぬ也。しかるに霞たる月の移るにひかれてかすまぬ水もかすみ

てみゆる也。かすむは陽の気と心うべし。

○白雲の絶まになびく青柳の葛城山に春風ぞ吹（七四）

青柳のかづらき山とは此山に青柳の有とはなし。かづらきといはんためと云義あり。又有と云説もあり。二条家にはなしと云り。此哥は柳の哥のつゐでにあればかづらきに柳は一定也。景曲也。

（自讃歌聞書）此歌は景気の歌也。雲の際〳〵より柳の打なびきたる面白し。かつらぎ山といふはかゝる太山にも春きてのどかに成といふ躰也。青柳はかつらぎといはん枕詞也。葛城山に柳あるにてはなし。但有まじにも定む間敷也。幽玄にみるべし。

のごとく、五七歌注では「水は陰の気であるからかすまない」と陰陽説で説明している点が共通し、七四歌注では、青柳の葛城山について枕詞説を出し、実在の青柳の有無について、本書が「二条家にはなしと云り。」を紹介しているが、両説をあげ、態度を保留している点も同一である。その他一二二歌の、

○時こそあれたのむの雁の別さへ花ちる比のみよしのゝ里

についてみよしのは武蔵国のみよしのであることを指摘しつゝも大和国のみよしのをかけて詠んだとするのも同一である。こうして本書の注文と兼載注である『新古今抜書抄』『自讃歌聞書』所説との間に相関が認められるのであるが、その関係は後に書き加えられたと思われる小書頭注を別として、本注文作者が両書を参看したというような直接的書承関係にはないことに注意しなければならない。このことは例えば『抜書抄』と本書の重なる歌二三首で相関ある注文四首、『自讃歌聞書』と重なる歌二四首で相関ある注文三首に過ぎず、(3)にみたごとく心敬説と『抜書抄』所説が齟齬したり、『自讃歌聞書』では、

○かきくらし猶ふる里の雪のうちに跡こそみえね春はきにけり（四）

なを古郷の雪とはふる郷へは人の来ぬ所也。春は来れ共跡のなきといふなるべし。春なれ共かきくらし雪のふりて跡さへふりうづむ義なり。此哥は春にて春の来ぬやうに読なしたる心妙なり。

（自讃歌聞書）是はたけある歌也。心に深き事はなし。猶古郷と云るは春来れ共雪のふるよし也。跡こそみえねは春の来て跡みえぬと申人有。いかゞ。たゞ人の跡こそみえね春きぬると云心也。古郷の感をよみたるなるべし。

のごとく、『自讃歌聞書』が退けた「春の来て跡みえぬ」解を説いていることなどからも云える。こうしてみると、本注作者に心敬・宗祇・木戸説を伝え、『新古今抜書抄』や『自讃歌

聞書』所説と相関した解を与えたのは兼載その人であったと思われる。兼載は心敬に師事、宗祇に兄事し、孝範とは親交があった。本書には兼載の名が二度あらわれている。二三歌注に良経の作者名について「有所に前摂政と書たる事あり。兼載竹之中殿に是を尋申されし也。此集のときは在世の事なればたがひたる事也とす。」という記述があり、今一つは俊成歌。

○駒とめて猶水かはん山吹の花の露そふるでの玉川（一六一）

なを水かはん山吹のとは、駒を打入て水かひながら山吹の花の見事なるを見たるさま也。花の露とはよはき詞と兼載云給ふとかや。今はくるしからず。

の注文である。ここで注目されるのは、いずれも兼載に敬語を用いていることであって、本注作者の心敬・静寂・宗祇・孝範・宗長などの人々に対する態度とは異なった特別な意識が窺われることである。さらに兼載に関連して云えば、本注文の特異な歌評語に「なりの歌」というのがある。なりは形・姿・様の意の語であるが、夏部に集中してあらわれている。なりの歌と評した歌を若干あげると、

経信

228早苗とる山田のかけひもりにけり引しめなわに露ぞこぼる

忠良

237樗さくそともの木陰露落てさみだれはるゝ風渡るなり

忠良

244橘の花ちる軒のしのぶ草むかしをかけて露ぞこぼるゝ

慈円

255五月やみみじかき夜はのうたゝねに花橘の袖に涼しき

式子

260窓ちかき竹のはすさむ風の音にいとゞ短きうたゝねの夢

などで叙景的な歌が多いが、例えば二三七歌に「是はなりの哥なり。心をつけて見るべき也。」というように叙景の場面情調が感覚的に生き〳〵と浮びあがってくるような歌を指すらしい。心敬の、

心さへほのめく花の陰にねて

の句について、兼載の『竹聞』(注8)に、

第三ノ句、ナリノ句也。関東ニテ連哥シトメノ句也。トクアケバ花ヲミント心サヘホノメク也。はやくせられし句也。

と「ナリの句」という評語があり、本注作者はあるいは兼載の評語を踏襲したものであるかもしれない。ともあれ、本書注に兼載のおとした影は大きいと言わねばならない。

三

本注作者の範囲を考える場合、今一人注目すべきは静喜である。静喜新田尚純は上野国新田庄を支配した城主で、連歌を好み、『新撰菟玖波集』に九句入集、家臣国繁三句、その子業繁二句入集し、尚純を中心に連歌会が盛んに催され、宗祇・兼載・宗長等と親交のあった人である。尚純が岩松に閑居し、静喜を名乗ったのは『寛政重修諸家譜』によると文亀年中（一五〇一～一五〇三）であったという。金子博士は『園塵』第三の「新田礼部亭にて　松杉を冬のはやしのにほひ哉」の兼載の句を明応七年（一四九八）冬と推定されており、（注9）この時期尚純はまだ隠棲していない。宗長の『東路の津登』永正六年（一五〇九）八月十七日の条には、「明る朝利根川の舟渡りをして上野の国新田の庄に礼部尚純隠遁ありて今は静喜、かの閑居に五六日、連歌たび〳〵におよべり。」とあって、明応七年以降永正六年以前に尚純は隠棲したことになり、『寛政重修諸家譜』にいう文亀年中は信じてよく、さらに鶴崎裕雄氏が引用された（注10）享保十年編の「新田岩松之系図附録」の「自画自賛連歌ノ発句三行」に「源尚純　為比丘尼琳書／掘つくす袖か岩ほの朝霞／郭公月にいさよふ雲間哉／風またて露にをられよ萩か花／文亀元年初冬廿一日／手自書之春秋四十有一」とあるよしで、これに拠ると、尚純隠棲は文亀元年、尚純四十一歳の時のこととなる。

ところで、本注作者を右の静喜周辺と考えるのは、三四歌注に、

○朝霞ふかくみゆるや煙立室の八嶋のあたりなるらむ

深く見ゆるや煙立とは、むろの八嶋は煙の立所なれば、見渡してみれば霞のふかく見ゆるは、あそこぞむろのやしまなるらむとおもひやりたる心也。正風の哥也。此煙は昔こゝに長者あり。娘あり。国司に約束する。有間王子此所に流浪ありし時、立より給ひしなり。逗留ありし。此娘に琴をゝしへ給ふ。あひたいあり。くわいにんす。国司しきりに所望有し。長者此女頓死すと申て、王子つれて御出有し也。さうそうのぎしきをなして、このしろと云実をやく。其煙なり。又は水の煙とも云。然に王子女房をつれ（マヽ）にひし時、琴を橋にしてわたりし。こゝを琴橋と云。下総国にあり。武蔵野の草のもとにて産出す。有時、国の侍狩をしけるに、此女房を見付てつれていぬ。子をば捨る。此子を鷲がとりてそだてたるとかや。太田の鷲の明神是也。

と長々と説話を注している。有馬王子が、下総図に流浪し、長

者の家に滞在してその娘と懇ろになり、懐妊、常陸の国司に催促されて、長者は娘が早死したとして喪葬の儀式をしてつなし（このしろ）を焼いたという話は、吉田東伍『大日本地名辞書』所引の「慈天抄」にもあるが、「慈天抄」の話が、「あづま路の室のやしまに立けぶり誰がこのしろにつなでやくらん」の歌説話となっているのに対し、歌注説話は室の八島の煙についての説明ではあるが、有間王子説話の後日譚に興味を示し、武蔵野で捨てられた子を鷲が育てる動物育児譚と結び、「太田の鷲の明神是也」という明神縁起説話となっている。太田は新田庄太田（現群馬県太田市）と考えられ、鷲の明神の所在は不明であるが、この話は当時鷲の明神縁起としてこの地方で語られていたものであったと思われる。とするならば、当時太田は新田庄の一郷名に過ぎないのであるから本注作者は新田庄の者であったと考えられ、静寂を心敬に準じて大きな位置を与えているのも尚純ゆかりの者という印象を濃くする。本注作者が連歌師であったことは先人説が孝範を除きすべて連歌師であり、また二六四歌注に宗祇の「更て見ぬ光も涼し夕月夜」の句を引用し、二四九歌注の「香は躰、匂は用也。」といった注釈にも窺われるところである。以上によって、本注作者が新田庄の者で、尚純周辺連歌師であることが推定される。さらに尚純周辺で本注作者の可能性を有する人物を探れば、芳純法師が挙げられる。芳純の事蹟については金子・木藤両博士の御論考（注11）以上には不明であるが、先学の御論考に導かれつゝ必要事項を略記しておきたい。『二根集』（古典文庫）に、

一、関東かぬま芳順（兼載弟子 上野新田人）と云人と宗牧あらそひノ句

すミのぼる夜の月のさやけさ

水上の秋もゆかしきたかせ舟　芳順

澄のぼると水上とを宗牧さゝれし、宗養執筆也。芳順文字澄昇ト書、嫌ハぬ由云。都に当世はきらふ由云。芳順不用。

とあり、芳純は上野国新田の人で兼載の弟子であった。右の指合の文字争いについて木藤氏は「芳純が都で慣用されているという宗牧の主張をしりぞけて自説を固守したのは、兼載直門という自負心によるものと思われる。」（注12）と述べられたごとく、芳純は兼載弟子であることの自負を強くもっていたと思われる。芳純が何時から兼載の弟子になったかは不明である。尚純と兼載の交りは『園塵』第一に新田礼部家の詠二句がみえ、金子博士は文明十四年（一四八二）～十六年（一四八四）の間に兼載関東下向の可能性を指摘されており、（注13）かなり早くから両者の間には親交があり、さらに前述のように明応七年関

東下向の折、兼載は新田礼部亭に立寄って親交を重ねている。兼載は文亀元年（一五〇一）以降関東に滞留し、やがて永正七年（一五一〇）古河に没するが、『園塵』第四には尚純との交りの形跡はない。このことから金子博士は兼載と尚純との間で連歌の新撰集が企画されたのは明応七年下向の時かと考えられ、木藤氏は明応七・八年下向の折か、あるいは文亀元年兼載関東帰住後のいずれかと巾を持たせて考えられている。(注14) この兼載・尚純によって企画され、着手された個人別連歌撰集は、後に芳純に継承され、上下二巻に纒められて実隆によって『新編抄』と名づけられた。本文は散佚したが、芳純の乞いによって実隆が執筆した序文草案が『新編抄序代草』(天理図書館蔵)で、奥に「大永元年九月上澣」とあり、大永元年（一五二一）九月上旬のことであった。その序文に芳純について「尚純が草のゆかり、露のなさけしれる世すて人、芳純法師」とあり、芳純は新田尚純と縁故のある人であった。さらに金子博士は『新撰菟玖波集』に二句入集している源繁世（横手五郎、横手刑部少輔繁世）と横手木布軒の芳純法師とは同一人か縁者かと思われるとされており(注15) 繁世は伝宗鑑本『作者部類』によると横手、新田被官とあり、芳純は尚純の被官もしくはその縁者であった可能性もあることになる。尚純の『連歌会席式』に兼載を通じての心敬の影響が顕著であることも指摘されており、(注15) これらを考え合わせると芳純は尚純近辺にあって、かなり早くから尚純に従って兼載に親炙し、兼載・尚純没後、その撰集事業を継承・完成したものと思われる。木藤氏の御指摘のごとく、『実隆公記』天文二年五月二十七日の条の芳純の注記に「下野国」とあり、天文二年（一五三三）には芳純は下野国鹿沼に在住していた。(注16)仮に本注作者を芳純法師に擬すれば、本書執筆の時期は、三四歌注の「太田の鶯の明神」の注文の書き方から考えて下野国移住以前のことと思われ、（下野国鹿沼移住後であれば、新田庄太田もしくは上野国太田と書くのが普通であろう。）また、一六一歌注の「花の露とはよはき詞と兼載云給ふとかや。今はくるしからず」の注文からみて兼載の発言時からかなり年数が経過している口吻が感じられ、兼載没の永正七年以後、おそらく天文初年ごろの執筆ではなかったかと考えるのである。

注(1)　山崎敏夫氏は「新古今和歌集聞書について」(『新古今私説』昭51刊所収) で「私の旧蔵に属した『新古今三巻抄』という、春上下夏三巻だけの全註があって、（中略）小島吉雄氏が例の「註釈書の話」の中に「新古今注」の名において、その輪郭だけであるが、懇切にこれを世に紹介してくれているのである。」と述べられている。これから考えて「新古今注」「新古今三巻抄」はい

ずれも仮名であって、原題ではないらしい。

注(2) 中世文芸叢書『新古今注』(昭41刊)所収「新古今抜書抄解説」。なお引用本文も同書による。

注(3) 碧冲詞叢書『新古今抜書』(昭37刊)による。

注(4) 京都大学国語国文資料叢書『自撰歌註』(昭55刊)所収「宗祇自撰歌註」影印板本による。

注(5) 『月花集拾遺温泉寺本自撰歌注』(昭56刊)一九八頁頭注。

注(6) 島津忠夫・上条彰次編『百人一首古注抄』(昭57刊)解説にも指摘されている。

注(7) 黒川昌享「胡刻内閣文庫本『自撰歌聞書』」(三重大研究紀要・昭47・3)による。

注(8) 横山重編『竹林抄古注』(昭44刊)所収「竹聞」一四九頁。

注(9) 金子金治郎『連歌師宗祇伝考』(昭37刊)一四三頁。

注(10) 「上野田田人領主岩松尚純の連歌とその資料」(帝塚山学院短大研究年報・昭55・9)

注(11) 前掲『連歌師宗祇伝考』・木藤才蔵『連歌史論考』下(昭48刊)

注(12) 前掲『連歌史論考』下、六四〇頁。

注(13) 前掲『連歌師宗祇伝考』四二頁。

注(14) 前掲『連歌師宗祇伝考』一四三頁。『連歌史論考』下、六三九頁。

注(15) 金子金治郎『新撰菟玖波集の研究』(昭44刊)五五二～三頁。

注(16) 前掲『連歌史論考』下・六四〇頁。